薬草取

泉鏡花

一

日光掩蔽　地上清涼　靉靆垂布
如可承攬
其雨普等　四方倶下　流樹無量
率土充洽
山川険谷　幽邃所生　卉木薬艸
大小諸樹

「もし憚ながらお布施申しましょう。」
背後から呼ぶ優しい声に、医王山の半腹、樹木の鬱葱たる中を出でて、ふと夜の明けたように、空澄み、

気清（きよ）く、時しも夏の初（はじめ）を、秋見る昼の月の如（ごと）く、前途遥（ゆくてはるか）なる高峰（たかね）の上に日輪（にちりん）を仰（あお）いだ高坂（こうさか）は、愕然（がくぜん）として振返（ふりかえ）った。

人の声を聞き、姿を見ようとは、夢にも思わぬまで、遠く里を離れて、はや山深く入っていたのに、呼懸（よびか）けたのは女であった。けれども、高坂は一見して、直（ただち）に何ら害心（がいしん）のない者であることを認め得た。

女は片手拝（かたておが）みに、白い指尖（ゆびさき）を唇にあてて、俯向（うつむ）いて経（きょう）を聞きつつ、布施をしようというのであるから、

「否（いや）、私（わし）は出家（しゅっけ）じゃありません。」

と事もなげに辞退しながら、立停（たちどま）って、女のその雪

のような耳許から、下膨れの頬に掛けて、柔に、濃い浅葱の紐を結んだのが、露の朝顔の色を宿して、加賀笠という、縁の深いので眉を隠した、背には花籠、脚に脚絆、身軽に扮装ったが、艶麗な姿を眺めた。

かなたは笠の下から見透すが如くにして、

「これは失礼なことを申しました。お姿は些ともそうらしくはございませんが、結構な御経をお読みなさいますから、私は、あの、御出家ではございませんでも、御修行者でいらっしゃいましょうと存じまして。」

背広の服で、足拵えして、帽を真深に、風呂敷包を小さく西行背負というのにしている。彼は名を光行と

て、医科大学の学生である。
時に、妙法蓮華経薬草諭品、第五偈の半を開いたのを左の掌に捧げていたが、右手に支いた力杖を小脇に掻上げ、
「そりゃまあ、修行者は修行者だが、まだ全然素人で、どうして御布施を戴くようなものじゃない。
読方だって、何だ、大概、大学朱熹章句で行くんだから、尊い御経を勿体ないが、この山には薬の草が多いから、気の所為か知らん。麓からこうやって一里ばかりも来たかと思うと、風も清々しい薬の香がして、何となく身に染むから、心願があって近頃から読み覚

えたのを、誦（とな）えながら歩行（ある）いているんだ。」
かく打明（うちあ）けるのが、この際自他（じた）のためと思ったから、高坂は親しく先（ま）ず語って、さて、
「姉（ねえ）さん、お前さんは麓（ふもと）の村にでも住んでいる人なんか。」
「はい、二俣村（ふたまたむら）でございます。」
「ああ、越中（えっちゅう）の蛎波（となみ）へ通（かよ）う街道で、此処（ここ）に来る道の岐（わか）れる、目まぐるしいほど馬の通る、彼処（あすこ）だね。」
「さようでございます。もう路（みち）が悪うございまして、車が通りませんものですから、炭でも薪（たきぎ）でも、残らず馬に附けて出しますのでございます。

それに丁どこの御山の石の門のようになっており
ます、戸室口から石を切出しますのを、皆馬で運びま
すから、一人で五疋も曳きますのでございますよ。」
「それではその麓から来たんだね、唯一人。……」
静に歩を移していた高坂は、更にまた女の顔を見た。
「はい、一人でございます、そしてこちらへ参ります
まで、お姿を見ましたのは、貴方ばかりでございます
よ。」
いかにもという面色して、
「私もやっぱり、そうさ、半里ばかりも後だった、途
中で年寄った樵夫に逢って、路を聞いた外にはお前さ

んきり。
どうして往って還るまで、人ッ子一人いようとは思わなかった。」
この辺唯なだらかな蒼海原、沖へ出たような一面の草を眴しながら、
「や、ものを言っても一つ一つ谺に響くぞ、寂しい処へ、能くお前さん一人で来たね。」
女は乳の上へ右左、幅広く引掛けた桃色の紐に両手を挟んで、花籃を揺直し、
「貴方、その樵夫の衆にお尋ねなすって可うございました。そんなに嶮しい坂ではございませんが、些と

も人が通(かよ)いませんから、誠に知れにくいのでございます。」

「この奥の知れない山の中へ入るのに、目標(めじるし)があの石ばかりじゃ分らんではないかね。

それも、南北(みなみきた)、何方(どちら)か医王山道(いおうざんみち)とでも鑿(ほ)りつけてあればまだしもだけれど、唯(ただ)河原に転(ころが)っている、ごろた石の大きいような、その背後(うしろ)から草の下に細い道があるんだもの、ちょいと間違えようものなら、半年経歴(へめぐ)っても頂(いただき)には行(ゆ)かれないと、樵夫(きこり)も言ったんだが、全体何だって、そんなに秘(かく)して置く山だろう。全くあの石の裏より外(ほか)に、何処(どこ)も路はないのだろうか。」

「ございませんとも、この路筋(みちすじ)さえ御存じで在(い)らっしゃれば、世を離れました寂しさばかりで、獣(けだもの)も可恐(おそろしい)のはおりませんが、一足でも間違えて御覧なさいまし、何千丈(じょう)とも知れぬ谷で、行留(ゆきどま)りになりますやら、断崖(きりぎし)に突当(つきあた)りますやら、流(ながれ)に岩が飛びましたり、大木の倒れたので行(ゆ)く前(さき)が塞(ふさが)ったり、その間には草樹(くさき)の多いほど、毒虫もむらむらして、どんなに難儀でございましょう。

旧(もと)へ帰るか、倶利伽羅峠(くりからとうげ)へ出抜(でぬ)けますれば、無事に何方(どちら)か国へ帰られます。それでなくって、無理に先へ参りますと、終局(しまい)には草一条(くさひとすじ)も生えません焼山(やけやま)になっ

て、餓死(うえじに)をするそうでございます。

本当に貴方(あなた)がおっしゃいます通り、樵夫(きこり)がお教え申しました石は、飛騨(ひだ)までも末広(すえひろ)がりの、医王の要石(かなめいし)と申しまして、一度踏外(ふみはず)しますと、それこそ路がばらばらになってしまいますよ。」

名だたる北国(ほくこく)秘密の山、さもこそと思ったけれども、

「しかし一体、医王というほど、此処(ここ)で薬草が採れるのに、何故(なぜ)世間とは隔(へだた)って、行通(ゆきかよい)がないのだろう。」

「それは、あの承(うけたまわ)りますと、昔から御領主の御禁山(おとめやま)で、滅多(めった)に人をお入れなさらなかった所為(せい)なんでございますって。御領主ばかりでもございません。結構な

御薬の採れます場所は、また御守護の神々仏様も、出入をお止め遊ばすのでございましょうと存じます。」

譬えば仙境に異霊あって、恣に人の薬草を採る事を許さずというが如く聞えたので、これが少からず心に懸った。

「それでは何か、私なんぞが入って行って、欲い草を取って帰っては悪いのか。」

と高坂はやや気色ばんだが、悚然と肌寒くなって、思わず口の裡で、

慧雲含潤　電光晃耀　雷声遠震

令衆悦予

日光掩蔽（にっこうおんぺい）　地上清涼（ちじょうしょうりょう）　靉靆垂布（あいたいすいぶ）
如可承攬（にょかしょうらん）

二

「否（いいえ）、山さえお暴（あら）しなさいませねば、誰方（どなた）がおいでなさいましても、大事ないそうでございます。薬の草もあります上は、毒な草もないことはございません。無暗（むやみ）な者が採りますと、どんな間違（まちがい）になろうも知れませんから、昔から禁札（きんさつ）が打ってあるのでございましょう。

貴方（あなた）は、そうして御経（おきょう）をお読み遊ばすくらい、縦令（たとい）お山で日が暮れても些（ちっ）ともお気遣（きづかい）な事はございますまいと存じます。」

言いかけてまた近（ちかづ）き、

「あのさようなら、貴方（あなた）はお薬になる草を採りにおいでなさるのでござんすかい。」

「少々（しょうしょう）無理な願（ねがい）ですがね、身内に病人があって、とても医者の薬では治（なお）らんに極（きま）ったですから、この医王山でなくって外（ほか）にない、私が心当（こころあたり）の薬草を採りに来たんだが、何、姉（ねえ）さんは見懸（みか）けた処（ところ）、花でも摘みに上（あが）るんですか。」

「御覧の通(とおり)、花を売りますものでござんす。二日置き、三日置(おき)に参って、お山の花を頂いては、里へ持って出て商(あきな)います、丁(ちょう)ど唯今(ただいま)が種々(いろいろ)な花盛(はなざかり)。千蛇(せんじゃ)が池(いけ)と申しまして、頂(いただき)に海のような大(おおき)な池がございます。そしてこの山路(やまみち)は何処(どこ)にも清水なぞ流れてはおりません。その代(かわり)暑い時、咽喉(のど)が渇(かわ)きますと、蒼(あお)い小(ちいさ)な花の咲きます、日蔭(ひかげ)の草を取って、葉の汁(つゆ)を噛(か)みますと、それはもう、冷(つめた)い水を一斗(いっと)ばかりも飲みましたように寒うなります。それがないと凌(しの)げませんほど、水の少い処(ところ)ですから、菖蒲(あやめ)、杜若(かきつばた)、河骨(こうほね)はござんせんが、躑躅(つつじ)も山吹(やまぶき)も、あの、牡丹(ぼたん)も芍薬(しゃくやく)も、菊

の花も、桔梗（ききょう）も、女郎花（おみなえし）でも、皆一所（みんないっしょ）に開いていますよ、この六月から八月の末（すえ）時分まで。その牡丹だの、芍薬だの、結構な花が取れますから、たんとお鳥目（ちょうもく）が頂けます。まあ、どんなに綺麗（きれい）でございましょう。

そして貴方（あなた）、お望（のぞみ）の草をお採り遊ばすお心当（こころあたり）はどの辺でござんすえ。」

と笠（かさ）ながら差覗（さしのぞ）くようにして親しく聞く、時に清（すず）しい目がちらりと見えた。

高坂は何となく、物語の中なる人を、幽境（ゆうきょう）の仙家（せんか）に導く牧童（ぼくどう）などに逢う思いがしたので、言（ことば）も自（おのず）から慇懃（いんぎん）に、

「私も其処(そこ)へ行(ゆ)くつもりです。四季の花の一時(いっとき)に咲く、
何という処(ところ)でしょうな。」
「はい、美女(びじょ)ケ原(はら)と申します。」
「びじょがはら？」
「あの、美しい女と書きますって。」
女は俯向(うつむ)いて羞(は)じたる色あり、物の淑(つつま)しげに微笑(ほほえ)む様子。
可懐(なつかし)さに振返(ふりかえ)ると、
「あれ。」と袖(そで)を斜(なな)めに、袂(たもと)を取って打傾(うちかたむ)き、
「あれ、まあ、御覧なさいまし。」
その草染(くさぞめ)の左の袖に、はらはらと五片三片(いつひらみひら)紅(くれない)を点

じたのは、山鳥の抜羽か、非ず、蝶か、非ず、蜘蛛か、非ず、桜の花の零れたのである。

「どうでございましょう、この二、三ヶ月の間は、何処からともなく、こうして、ちらちらちらちら絶えず散って参ります。それでも何処に桜があるか分りません。美女ヶ原へ行きますと、十里南の能登の岬、七里北に越中立山、背後に加賀が見晴せまして、もうこの節は、霞も霧もかかりませんのに、見紛うようなそれらしい花の梢もございませぬが、大方この花片は、煩い町方から逃げて来て、遊んでいるのでございましょう。それともあっちこっち山の中を何かの御使に

歩いているのかも知れません。」
と女が高く仰ぐに連れ、高坂も葎の中に伸上った。草の緑が深くなって、倒に雲に映るか、水底のような天の色、神霊秘密の気を籠めて、薄紫と見るばかり。

「その美女ヶ原までどのくらいあるね、日の暮れない中行かれるでしょうか。」

「否、こう桜が散って参りますから、直でございます。私も其処まで、お供いたしますが、今日こそ貴方のようなお連がございますけれど、平時は一人で参りますから、日一杯に里まで帰るのでございます。」

「日一杯？」と思いも寄らぬ状。
「どんなにまた遠い処のように、樵夫がお教え申したのでござんすえ。」
「何、樵夫に聞くまでもないです。私に心覚が丁とある。先ず凡そ山の中を二日も三日も歩行かなけれやならないですな。
　尤も上りは大抵どのくらいと、そりゃ予て聞いてはいるんですが、日一杯だのもう直だの、そんなに輒く行かれる処とは思わない。
　御覧なさい、こうやって、五体の満足なはいうまでもない、谷へも落ちなけりゃ、巌にも躓かず、衣物に

綻（ほころび）が切れようじゃなし、生爪（なまづめ）一つ剝（はが）しやしない。

支度（したく）はして来たっても餒（ひもじ）い思いもせず、その蒼（あお）い花の咲く草を捜さなけりゃならんほど渇（かわ）く思いをするでもなし、勿論（もちろん）この先どんな難儀に逢おうも知れんが、それだって、花を取りに里から日帰（ひがえり）をするという、姉（ねえ）さんと一所（いっしょ）に行（ゆ）くんだ、急に日が暮れて闇になろうとも思われないが、全くこれぎりで、一足（ひとあし）ずつ出さえすりゃ、美女ヶ原になりますか。」

「ええ、訳（わけ）はございません、貴方（あなた）、そんなに可恐処（おそろしいところ）と御存じで、その上、お薬を採りに入らしったのでございますか。」

言下(ごんか)に、
「実際命懸(いのちがけ)で来ました。」と思い入(い)って答えると、女はしめやかに、
「それでは、よくよくの事でおあんなさいましょうねえ。
でも何もそんな難(むずか)しい御山(おやま)ではありません。但(ただ)此処(ここ)は霊山(れいざん)とか申す事、酒を覆(こぼ)したり、竹の皮を打棄(うっちゃ)ったりする処(ところ)ではないのでございます。まあ、難有(ありがた)いお寺の庭、お宮の境内(けいだい)、上(うえ)つ方(がた)の御門(ごもん)の内のような、歩けば石一つありませんでも、何となく謹(つつし)みませんとなりませんばかりなのでございます。そして貴方(あなた)は、

美女ヶ原にお心覚えの草があって、其処までお越し遊ばすに、二日も三日もお懸りなさらねばなりませんような気がすると仰有いますが、何時か一度お上り遊ばした事がございますか。」

「一度あるです。」

「まあ。」

「確に美女ヶ原というそれでしょうな、何でも躑躅や椿、菊も藤も、原一面に咲いていたと覚えています。けれども土地の名どころじゃない、方角さえ、何処が何だか全然夢中。

今だってやっぱり、私は同一この国の者なんですが、

その時は何為（なぜ）か家を出て一月余（あまり）、山へ入って、かれこれ、何でも生れてから死ぬまでの半分は徜徉（さまよ）って、漸々（ようよう）其処（そこ）を見たように思うですが。」

高坂は語りつつも、長途（ちょうと）に苦（くるし）み、雨露（あめつゆ）に曝（さら）された当時を思い起すに付け、今も、気弱り、神（しん）疲れて、ここに深山（みやま）に塵（ちり）一つ、心に懸（かか）らぬ折ながら、なおかつ垂々（たらたら）と背（そびら）に汗。

糸のような一条路（ひとすじみち）、背後（うしろ）へ声を運ぶのに、力を要した所為（せい）もあり、薬王品（やくおうほん）を胸に抱（いだ）き、杖を持った手に帽（ぼう）を脱ぐと、清き額（ひたい）を拭（ぬぐ）うのであった。

それと見る目も敏（さと）く、

「もし、御案内がてら、あの、私がお前（さき）へ参りましょう。どうぞ、その方がお話も承（うけたまわ）りようございますから。」

一議（いちぎ）に及ばず、草鞋（わらじ）を上げて、道を左へ片避（かたよ）けた、足の底へ、草の根が柔（やわらか）に、葉末（はずえ）は脛（はぎ）を隠したが、裾（すそ）を引く荊（いばら）もなく、天地閑（てんちかん）に、虫の羽音（はおと）も聞えぬ。

三

「御免なさいまし。」

と花売（はなうり）は、袂（たもと）に留（と）めた花片（はなびら）を惜（おし）やはらはら、袖（そで）を胸

に引合せ、身を細くして、高坂の体を横に擦抜（すりぬ）けたその片足も葎（むぐら）の中、路はさばかり狭いのである。五尺ばかり前にすらりと、立直（たちなお）る後姿、裳（もすそ）を籠めた草の茂り、近く緑に、遠く浅葱（あさぎ）に、日の色を隈取（くまど）る他に、一木（ぼく）のありて長く影を倒すにあらず。

背後（うしろ）から声を掛け、

「大分（だいぶん）草深くなりますな。」

「段々頂（いただき）が近いんですよ。やがてこの生（はえ）が人丈（ひとだけ）になって、私の姿が見えませんようになりますと、それを潜（くぐ）って出ます処（ところ）が、もう花の原でございます。」

と撫肩（なでかた）の優しい上へ、笠の紐弛（ゆる）く、紅（べに）のような唇を

つけて、横顔で振向いたが、清しい目許に笑を浮べて、
「どうして貴方はそんなにまあ唐天竺とやらへでもお出で遊ばすように遠い処とお思いなさるのでございましょう。」
高坂は手なる杖を荒く支いて、土を騒がす事さえせず、慎んで後に続き、
「久しい以前です。一体誰でも昔の事は、遠く隔ったように思うのですから、事柄と一所に路までも遥に考えるのかも知れません。そうして先ず皆夢ですよ。
けれども不残事実で。

私が以前美女ヶ原で、薬草を採ったのは、もう二十年、十年が一昔（ひとむかし）、ざっと二昔（ふたむかし）も前になるです、九歳（ここのつ）の年の夏。」

「まあ、そんなにお稚（ちいさ）い時。」

「尤（もっと）も一人じゃなかったです。さる人に連れられて来たですが、始め家を迷って出た時は、東西も弁（わきま）えぬ、取って九歳（ここのつ）の小児（こども）ばかり。

人は高坂の光（みい）、私の名ですね、光坊（みいぼう）が魔に捕（と）られたのだと言いました。よくこの地で言う、あの、天狗（てんぐ）に攫（さら）われたそれです。また実際そうかも知れんが、幼心（おさなごころ）で、自分じゃ一端（いっぱし）親を思ったつもりで。

まだ両親ともあったんです。母親が大病で、暑さの取附にはもう医者が見放したので、どうかしてそれを復したい一心で、薬を探しに来たんですな。」

　高坂は少時黙った。

「こう言うと、何か、さも孝行の吹聴をするようで人聞が悪いですが、姉さん、貴女ばかりだから話をする。

　今でこそ、立派な医者もあり、病院も出来たけれど、どうして城下が二里四方に開けていたって、北国の山の中、医者らしい医者もない。まあまあその頃、土地第一という先生まで匙を投げてしまいました。打明け

て、父が私たちに聞かせるわけのものじゃない。

母様（おっかさん）は病気（きいきい）が悪いから、大人（おとな）しくしろよ、くらいにしてあったんですが、何となく、人の出入（ではいり）、家（うち）の者の起居挙動（たちいふるまい）、大病というのは知れる。

それにその名医というのが、五十恰好（かっこう）で、天窓（あたま）の兀（は）げたくせに髪の黒い、色の白い、ぞろりとした優形（やさがた）な親仁（おやじ）で、脈を取るにも、蛇（じゃ）の目（め）の傘（かさ）を差すにも、小指を反（そら）して、三本の指で、横笛を吹くか、女郎（じょろう）が煙管（きせる）を持つような手付（てつき）をする、好かない奴。

私がちょこちょこ近処（きんじょ）だから駈出（かけだ）しては、薬取（くすりとり）に行（ゆ）くのでしたが、また薬局というのが、その先生の甥（おい）

とかいう、ぺろりと長い顔の、額（ひたい）から紅（べに）が流れたかと思う鼻の尖（さき）の赤い男、薬簞笥（くすりだんす）の小抽斗（こひきだし）を抜いては、机の上に紙を並べて、調合をするですが、先ずその匙加減（さじかげん）が如何（いか）にも怪（あや）しい。

　相応（そうおう）に流行（はや）って、薬取（くすりとり）も多いから、手間取（てまど）るのが焦（じれ）ったさに、始終行（ゆ）くので見覚えて、私がその抽斗（ひきだし）を抜いて五つも六つも薬局の机に並べて遣（や）る、終（しまい）には、先方（さき）の手を待たないで、自分で調合をして持って帰りました。私のする方が、かえって目方（めかた）が揃（そろ）うくらい、大病だって何だって、そんな覚束（おぼつか）ない薬で快くなろうとは思えんじゃありませんか。

その頃父は小立野（こだつの）と言う処（ところ）の、験（げん）のある薬師（やくし）を信心で、毎日参詣するので、私もちょいちょい連れられて行ったです。

後（のち）は自分ばかり、乳母（うば）に手を曳（ひ）かれてお詣（まいり）をしましたッけ。別に拝みようも知らないので、唯（ただ）、母親の病気の快くなるようと、手を合せる、それも遊び半分。

六月の十五日は、私の誕生日で、その日、月代（さかやき）を剃（そ）って、湯に入ってから、紋着（もんつき）の袖（そで）の長いのを被（き）せてもらいました。

私がと言っては可笑（おかし）いでしょう。裾模様（すそもよう）の五（いつ）ツ紋（もん）、熨斗目（のしめ）の派手な、この頃聞きや加賀染（かがぞめ）とかいう、菊だ

の、萩だの、桜だの、花束が紋になっている、時節に構わず、種々の花を染交ぜてあります。尤も今時そんな紋着を着る者はない、他国には勿論ないですね。一体この医王山に、四季の花が一時に開く、その景勝を誇るために、加賀ばかりで染めるのだそうですな。まぁ、その紋着を着たんですね、博多に緋の一本独鈷の小児帯なぞで。

坊やは綺麗になりました。母も後毛を掻上げて、そして手水を使って、乳母が背後から羽織らせた紋着に手を通して、胸へ水色の下じめを巻いたんだが、自分で、帯を取って〆ようとすると、それなり力が抜けて、

膝を支（つ）いたので、乳母が慌（あわ）て確乎（しっかり）抱くと、直（すぐ）に天鵝絨（びろうど）の括枕（くくりまくら）に鳩尾（みぞおち）を圧（おさ）えて、その上へ胸を伏せたですよ。

産（う）んで下すった礼を言うのに、唯（ただ）御機嫌好（よ）うとさえ言えば可（い）いと、父から言いつかって、枕頭（まくらもと）に手を支（つ）いて、其処（そこ）へ。顔を上げた私と、枕に凭（もた）れながら、熟（じっ）と眺めた母と、顔が合うと、坊や、もう復（なお）るよと言って、涙をはらはら、差俯向（さしうつむ）いて弱々（よわよわ）となったでしょう。

父が肩を抱いて、徐（そっ）と横に寝かした。乳母が、掻巻（かいまき）を被（き）せ懸けると、襟（えり）に手をかけて、向うを向いてしまいました。

台所から、中の室（ま）から、玄関あたりは、ばたばた人

の行交う音。尤も帯をしめようとして、濃いお納戸の紋着に下じめの装で倒れた時、乳母が大声で人を呼んだです。

やがて医者が袴の裾を、ずるずるとやって駈け込んだ。私には戸外へ出て遊んで来いと、乳母が言ったもんだから、庭から出たです。今も忘れない。何とも言いようのない、悲しい心細い思いがしましたな。」

花売は声細く、

「御道理でございますねえ。そして母様はその後快くおなりなさいましたの。」

「お聞きなさい、それからです。

小児は切て仏の袖に縋ろうと思ったでしょう。小立野と言うは場末です。先ず小さな山くらいはある高台、草の茂った空地沢山な、人通りのない処を、その薬師堂へ参ったですが。

朝の内に月代、沐浴なんかして、家を出たのは正午過だったけれども、何時頃薬師堂へ参詣して、何処を歩いたのか、どうして寝たのか。

翌朝はその小立野から、八坂と言います、八段に黒い滝の落ちるような、真暗な坂を降りて、川端へ出ていた。川は、鈴見という村の入口で、流も急だし、瀬の色も凄いです。

橋は、雨や雪に白(しら)っちゃけて、長いのが処々(ところどころ)、鱗(うろこ)の落ちた形に中弛(なかだる)みがして、のらのらと架(かか)っているその橋の上に茫然(ぼんやり)と。

後(のち)に考えてこそ、翌朝(あくるあさ)なんですが、その節(せつ)は、夜を何処(どこ)で明かしたか分らないほどですから、小児(こども)は晩方(ばんがた)だと思いました。この医王山の頂(いただき)に、真白な月が出ていたから。

しかし残月(ざんげつ)であったんです。何為(なぜ)かというにその日の正午頃(ひる)、ずっと上流の怪(あや)しげな渡(わたし)を、綱に掴(つか)まって、宙へ釣(つる)されるようにして渡った時は、顔が赫(かっ)とする晃々(きらきら)と烈(はげし)い日当(ひあたり)。

こういうと、何だか明方（あけがた）だか晩方（ばんがた）だか、まるで夢のように聞えるけれども、渡（わたし）を渡ったには全く渡ったですよ。

山路（やまじ）は一日がかりと覚悟をして、今度来るには麓（ふもと）で一泊したですが、昨日（きのう）丁度前（ちょうどぜん）の時と同一（おなじ）時刻、正午（ひる）頃です。岩も水も真白な日当（ひあたり）の中を、あの渡（わたし）を渡って見ると、二十年の昔に変らず、船着（ふなつき）の岩も、船出（ふなで）の松も、確（たしか）に覚えがありました。

しかし九歳（ここのつ）で越した折は、爺（じい）さんの船頭がいて船を扱いましたっけ。

昨日（きのう）は唯（ただ）綱を手繰（たぐ）って、一人で越したです。乗合（のりあい）も

何もない。

御存じの烈しい流で、棹の立つ瀬はないですから、綱は二条、染物をしんし張にしたように隙間なく手懸が出来ている。船は小さし、胴の間へ突立って、釣下って、互違に手を掛けて、川幅三十間ばかりを小半時、幾度もはっと思っちゃ、危さに自然に目を塞ぐ。その目を開ける時、もし、あの丈の伸びた菜種の花が断崖の巌越に、ばらばら見えんでは、到底この世の事とは思われなかったろうと考えます。

十里四方には人らしい者もないように、船を纜った大木の松の幹に立札して、渡船銭三文とある。

話は前後になりました。

そこで小児は、鈴見の橋に彳んで、前方を見ると、正面の中空へ、仏の掌を開いたように、五本の指の並んだ形、矗々立ったのが戸室の石山。靄か、霧か、後を包んで、年に二、三度好く晴れた時でないと、蒼く顕れて見えないのが、即ちこの医王山です。

其処にこの山があるくらいは、予て聞いて、小児心にも方角を知っていた。そして迷子になったか、魔に捉られたか、知れもしないのに、稚な者は、暢気じゃありませんか。

それが既に気が変になっていたからであろうも知れ

んが、お腹（なか）が空かぬだけに一向（いっこう）苦にならず。壊れた竹の欄干（らんかん）に摑（つかま）って、月の懸（かか）った雲の中の、あれが医王山と見ている内に、橋板（はしいた）をことこと踏んで、

　向（むこう）の山に、猿が三疋（びき）住みやる。中の小猿が、能（よ）う物（もの）饒舌（しゃべ）る。何と小児（こども）ども花折（はなお）りに行（ゆ）くまいか。今日の寒いに何の花折りに。牡丹（ぼたん）、芍薬（しゃくやく）、菊の花折りに。一本折っては笠に挿（さ）し、二本折っては、蓑（みの）に挿し、三枝（みえだ）四枝（よえだ）に日が暮れて……とふと唄いながら。……

　何となく心に浮んだは、ああ、向うの山から、月影に見ても色の紅（くれない）な花を採って来て、それを母親の髪に挿したら、きっと病気が復（なお）るに違いないと言う事で

す。また母は、その花を簪にしても似合うくらい若かったですな。」

高坂は旧来た方を顧みたが、草の外には何もない、一歩前へ花売の女、如何にも身に染みて聞くように、俯向いて行くのであった。

「そして確に、それが薬師のお告であると信じたですね。

さあ思い立っては矢も楯も堪らない、渡り懸けた橋を取って返して、堤防伝いに川上へ。

後でまた渡を越えなければならない路ですがね、橋から見ると山の位置は月の入る方へ傾いて、かえっ

て此処（ここ）から言うと、対岸（むこうぎし）の行留（ゆきどま）りの雲の上らしく見えますから、小児心（こどもごころ）に取って返したのが丁（ちょう）ど幸（さいわい）と、橋から渡場（わたしば）まで行（ゆ）く間の、あの、岩淵（いわぶち）の岩は、人を隔てる医王山の一（いち）の砦（とりで）と言っても可（よ）い。戸室（とむろ）の石山（いしやま）の麓が直（すぐ）に流（ながれ）に迫る処（ところ）で、累（かさな）り合った岩石だから、路は其処（そこ）で切れるですものね。

岩淵をこちらに見て、大方（おおかた）跣足（はだし）でいたでしょう、すたすた五里も十里も辿（たど）った意（つもり）で、正午（ひる）頃に着いたのが、鳴子（なるこ）の渡（わたし）。」

四

「馬士にも、荷担夫にも、畑打つ人にも、三人二人ぐらいずつ、村一つ越しては川沿の堤防へ出るごとに逢ったですが、皆唯立停って、じろじろ見送ったばかり、言葉を懸ける者はなかったです。これは熨斗目の紋着振袖という、田舎に珍しい異形な扮装だったから、不思議な若殿、迂濶に物も言えないと考えたか、真昼間、狐が化けた？　とでも思ったでしょう。それとも本人逆上返って、何を言われても耳に入らなかったのかも解らんですよ。

ふとその渡場の手前で、背後から始めて呼び留めた

親仁（おやじ）があります。兄（にい）や、兄（にい）やと太い調子。

私は仰向（あおむ）いて見ました。

ずんぐり脊（せ）の高い、銅色（あかがねいろ）の巌乗造（がんじょうづくり）な、年配四十五、六、古い単衣（ひとえ）の裾（すそ）をぐいと端折（はしょ）って、赤脛（からずね）に脚絆（きゃはん）、素足に草鞋（わらじ）、かっと眩（まばゆ）いほど日が照るのに、笠は被（かぶ）らず、その菅笠（すげがさ）の紐に、桐油合羽（とうゆがっぱ）を畳（たた）んで、小さく縦（たて）に長く折ったのを結（ゆわ）えて、振分（ふりわ）けにして肩に投げて、両提（ふたつさげ）の煙草入（たばこいれ）、大きいのをぶら提（さ）げて、どういう気か、渋団扇（しぶうちわ）で、はたはたと胸毛を煽（あお）ぎながら、てくりてくり寄って来て、何処（どこ）へ行（ゆ）くだ。

御山（おやま）へ花を取りに、と返事すると、ふんそれならば

可（よ）し、小父（おじ）が同士（どうし）に行って遣（や）るべい。但（ただし）、この前（さき）の渡（わたし）を一つ越さねばならぬで、渡守（わたしもり）が咎立（とがめだて）をすると面倒じゃ、さあ、負（おぶ）され、と言うて背中を向けたから、合羽（かっぱ）を跨（また）ぐ、足を向うへ取って、猿（さる）の児（こ）背負（おんぶ）、高く肩車に乗せたですな。

その中（うち）も心の急（せ）く、山はと見ると、戸室（とむろ）が低くなって、この医王山が鮮明（あざやか）な深翠（ふかみどり）、肩の上から下に瞰下（みおろ）されるような気がしました。位置は変って、川の反対（むこう）の方に見えて来た、なるほど渡（わたし）を渡らねばなりますまい。

足を圧（おさ）えた片手を後（うしろ）へ、腰の両提（ふたつさげ）の中をちゃらちゃらさせて、爺様（じさま）頼んます、鎮守（ちんじゅ）の祭礼（まつり）を見に、頼

まれた和郎(わろ)じゃ、と言うと、船を寄せた老人(としより)の腰は、親仁(おやじ)の両提(ふたつさげ)よりもふらふらして干柿(ほしがき)のように干(ひ)からびた小さな爺(じじい)。やがて綱に摑(つか)まって、縋(すが)ると疾(はや)い事！　雀(すずめ)が鳴子(なるこ)を渡るよう、猿が梢(こずえ)を伝うよう、さらさら、さっと。」

高坂は思わず足踏(あしぶみ)をした、草の茂(しげり)がむらむらと揺(ゆら)いで、花片(はなびら)がまたもや散り来る——二片三片(ふたひらみひら)、虚空(おおぞら)から。——

「左右へ傾く舷(ふなばた)へ、流(ながれ)が蒼く搦(から)み着いて、真白に颯(さっ)と翻(ひるがえ)ると、乗った親仁も馴れたもので、小児(こども)を担(かつ)い

だまま仁王立(におうだち)。

真蒼(まっさお)な水底(みなそこ)へ、黒く透(す)いて、底は知れず、目前(めさき)へ押被(おっかぶ)さった大巌(おおいわ)の肚(はら)へ、ぴたりと船が吸寄(すいよ)せられた。岸は可恐(おそろし)く水は深い。

巌角(いわかど)に刻(きざ)を入れて、これを足懸(あしがか)りにして、こちらの堤防(どて)へ上(あが)るんですな。昨日(きのう)私が越した時は、先ず第一番の危難に逢うかと、膏汗(あぶらあせ)を流して漸々(ようよう)縋(すが)り着いて上(あが)ったですが、何、その時の親仁は……平気なものです。」

高坂は莞爾(にっこり)して、

「爪尖(つまさき)を懸けると更に苦(く)なく、負(おぶ)さった私の方がか

えって目を塞（ふさ）いだばかりでした。

　さて、些（ちっ）と歩行（ある）かっせえと、岸で下してくれました。

それからは少しずつ次第に流（ながれ）に遠ざかって、田の畦（あぜ）三つばかり横に切れると、今度は赤土（あかつち）の一本道、両側にちらほら松の植わっている処（ところ）へ出ました。

　六月の中ばとはいっても、この辺には珍（めずら）しい酷（ひど）く暑い日だと思いましたが、川を渡り切った時分から、戸室山（とむろやま）が雲を吐いて、処々（ところどころ）田の水へ、真黒な雲が往（い）ったり、来たり。

　並木（なみき）の松と松との間が、どんよりして、梢（こずえ）が鳴る、と思うとはや大粒な雨がばらばら、立樹（たちき）を五本と越え

ない中に、車軸を流す烈しい驟雨。ちょッ待て待て、と独言して、親仁が私の手を取って、そら、台なしになるから脱げと言うままにすると、帯を解いて、紋着を剥いで、浅葱の襟の細く掛った襦袢も残らず。

小児は糸も懸けぬ全裸体。

雨は浴るようだし、恐さは恐し、ぶるぶる顫えると、親仁が、強いぞ強いぞ、と言って、私の衣類を一丸げにして、懐中を膨らますと、紐を解いて、笠を一文字に冠ったです。

それから幹に立たせて置いて、やがて例の桐油合羽を開いて、私の天窓からすっぽりと目ばかり出るほど、

まるで渋紙（しぶかみ）の小児（こども）の小包。

いや！　出来た、これなら海を潜（もぐ）っても濡れることではない、さあ、真直（まっすぐ）に前途（むこう）へ駈け出せ、曳（えい）、と言うて、板で打（ぶ）たれたと思った、私の臀（しり）をぴたりと一つ。

濡れた団扇（うちわ）は骨ばかりに裂けました。

怪飛（けしと）んだようになって、蹌踉（よろ）けて土砂降（どしゃぶり）の中を飛出（とびだ）すと、くるりと合羽（かっぱ）に包まれて、見えるは脚ばかりじゃありませんか。

　赤蛙（あかがえる）が化けたわ、化けたわと、親仁（おやじ）が呵々（からから）と笑ったですが、もう耳も聞えず真暗三宝（まっくらさんぼう）。何か黒山（くろやま）のような物に打付（ぶっつ）かって、斛斗（もんどり）を打って仰様（のけざま）に転ぶと、滝のよ

うな雨の中に、ひひんと馬の嘶く声。

漸々人の手に扶け起されると、合羽を解いてくれたのは、五十ばかりの肥った婆さん。馬士が一人腕組をして突立っていた。門の柳の翠から、黒駒の背へ雫が流れて、はや雲切がして、その柳の梢などは薄雲の底に蒼空が動いています。

妙なものが降り込んだ。これが豆腐なら資本入らずじゃ、それともこのまま熨斗を附けて、鎮守様へ納めさっしゃるかと、馬士は掌で吸殻をころころ遣る。

主さ、どうした、と婆さんが聞くんですが、四辺をきょときょと眴すばかり。

何処から出た乞食だよ、とまた酷いことを言います。尤も裸体が渋紙に包まれていたんじゃ、氏素性あろうとは思わぬはず。

衣物を脱がせた親仁はと、唯悔しく、来た方を眺めると、脊が小さいから馬の腹を透かして雨上りの松並木、青田の縁の用水に、白鷺の遠く飛ぶまで、畷がずっと見渡されて、西日がほんのり紅いのに、急な大雨で往来もばったり、その親仁らしい姿も見えぬ。

余の事にしくしく泣き出すと、こりゃ饑うて口も利けぬな、商売品で銭を噛ませるようじゃけれど、一つ振舞うて遣ろかいと、汚い土間に縁台を並べた、

狭ックるしい暗い隅の、苔の生えた桶の中から、豆腐を半挺、皺手に白く積んで、そりゃそりゃと、頬辺の処へ突出してくれたですが、どうしてこれが食べられますか。

そのくせ腹は干されたように空いていましたが、胸一杯になって、頭を掉ると、はて食好をする犬の、と呟いて、ぶくりとまた水へ落して、これや、慈悲を享けぬ餓鬼め、出て失せと、私の胸へ突懸けた皺だらけの手の黒さ、顔も漆で固めたよう。

黒婆どの、情ない事せまいと、名もなるほど黒婆というのか、馬士が中へ割って入ると、貸を返せ、この

人足めと怒鳴ったです。するとその豆腐の桶のある後が、蜘蛛の巣だらけの藤棚で、これを地境にして壁も垣もない隣家の小家の、炉の縁に、膝に手を置いて蹲っていた、十ばかりも年上らしいお媼さん。

見兼ねたか、縁側から摺って下り、ごつごつ転がった石塊を跨いで、藤棚を潜って顔を出したが、柔和な面相、色が白い。

小児衆小児衆、私が許へござれ、と言う。疾く白媼が家へ行かっしゃい、借がなくば、此処へ馬を繋ぐではないと、馬士は腰の胴乱に煙管をぐっと突込んだ。

そこで裸体で手を曳かれて、土間の隅を抜けて、

隣家へ連込まれる時分には、鳶が鳴いて、遠くで大勢の人声、祭礼の太鼓が聞えました。」

高坂は打案じ、

「渡場からこちらは、一生私が忘れない処なんだね、で今度来る時も、前の世の旅を二度する気で、松一本、橋一ツも心をつけて見たんだけれども、それらしい家もなく、柳の樹も分らない。それに今じゃ、三里ばかり向うを汽車が素通りにして行くようになったから、人通もなし。大方、その馬士も、老人も、もうこの世の者じゃあるまいと思う、私は何だかその人たちの、あのまま影を埋めた、丁どその上を、姉さん。」

花売は後姿のまま引留められたようになって停った。

「貴女と二人で歩行いているように思うですがね。」

「それからどう遊ばした、まあお話しなさいまし。」

と静に前へ。高坂も徐ろに、

「娘が来て世話をするまで、私には衣服を着せる才覚もない。暑い時節じゃで、何ともなかろが、さぞ餒かろうで、これでも食わっしゃれって。

囲炉裡の灰の中に、ぶすぶすと燻っていたのを、抜き出してくれたのは、串に刺した茄子の焼いたんで。ぶくぶく樺色に膨れて、湯気が立っていたです。

生豆腐（なまどうふ）の手摑（てづかみ）に比べては、勿体（もったい）ない御料理と思った。
それにくれるのが優（やさ）しげなお婆さん。
地（つち）が性（しょう）に合うで好（よ）う出来るが、まだこの村でも
初物（はつもの）じゃという、それを、空腹（すきばら）へ三つばかり頬張（ほおば）りました。熱い汁（つゆ）が下腹（したばら）へ、たらたらと染（し）みた処（ところ）から、
一睡（ひとねむり）して目が覚めると、きやきや痛み出して、やがて
吐くやら、瀉（くだ）すやら、尾籠（びろう）なお話だが七顛八倒（しちてんはっとう）。能（よく）も
生きていられた事と、今でも思うです。しかし、もう
その時は、命の親の、優しい手に抱かれていました。
世にも綺麗（きれい）な娘で。
人心地（ひとごこち）もなく苦しんだ目が、幽（かすか）に開（あ）いた時、初めて

見た姿は、艶(つやや)かな黒髪(くろかみ)を、男のような髷(まげ)に結んで、緋縮緬(ひぢりめん)の襦袢(じゅばん)を片肌脱(かたはだ)いでいました。日が経(た)って医王山へ花を採りに、私の手を曳(ひ)いて、楼(たかどの)に朱の欄干(てすり)のある、温泉宿を忍んで裏口から朝月夜(あさづきよ)に、田圃道(たんぼみち)へ出た時は、中形(ちゅうがた)の浴衣(ゆかた)に襦子(しゅす)の帯をしめて、鎌を一挺、手拭(てぬぐい)にくるんでいたです。その間(あいだ)に、白媼(しろうば)の内(うち)を、私を膝に抱いて出た時は、髷(まげ)を唐輪(からわ)のように結(ゆ)って、胸には玉を飾って、丁(ちょう)ど天女(てんにょ)のような扮装(いでたち)をして、車を牛に曳かせたのに乗って、わいわいという群集(ぐんじゅ)の中を、通ったですが、村の者が交(かわ)る交(がわ)る高く傘を擎(さしか)けて練(ね)ったですね。

村端で、寺に休むと、此処で支度を替えて、多勢が口々に、御苦労、御苦労というのを聞棄てに、娘は、一人の若い者に負させた私にちょっと頬摺をして、それから、石高路の坂を越して、賑かに二階屋の揃った中の、一番屋の棟の高い家へ入ったですが、私は唯幽に呻吟いていたばかり。尤も白姥の家に三晩寝ました。その内も、娘は外へ出ては帰って来て、膝枕をさせて、始終集って来る馬蠅を、払ってくれたのを、現に苦みながら覚えています。車に乗った天女に抱かれて、多人数に囲まれて通った時、庚申堂の傍に榛の木で、半ば姿を秘して、群集を放れてすっくと立っ

た、脊の高い親仁があって、熟と私どもを見ていたのが、確に衣服を脱がせた奴と見たけれども、小児はまだ口が利けないほど容体が悪かったんですな。
私はただその気高い艶麗な人を、今でも神か仏かと、思うけれど、後で考えると、先ずこうだろうと、思われるのは、姥の娘で、清水谷の温泉へ、奉公に出ていたのを、祭に就いて、村の若い者が借りて来て八ヶ村九ヶ村をこれ見よと喚いて歩行いたものでしょう。娘はふとすると、湯女などであったかも知れないです。」

「それからその人の部屋とも思われる、綺麗（きれい）な小座敷（こざしき）へ寝かされて、目の覚める時、物の欲しい時、咽（のど）の乾く時、涙の出る時、何時（いつ）もその娘が顔を見せない事はなかったです。

自分でも、もう、病気が復（なお）ったと思った晩、手を曳いて、てらてら光る長い廊下（ろうか）を、湯殿（ゆどの）へ連れて行って、一所（いっしょ）に透通（すきとお）るような温泉（いでゆ）を浴びて、岩を平（たいら）にした湯槽（ゆぶね）の傍（わき）で、すっかり体を流してから、櫛（くし）を抜いて、私の髪を柔（やわらか）く梳（す）いてくれる二櫛三櫛（ふたくしみくし）、やがてその櫛を湯殿の岩の上から、廊下の灯（あかり）に透（すか）して、気高い横顔

で、熟と見て、ああ好い事、美しい髪も抜けず、汚い虫も付かなかったと言いました。私も気がさして一所に櫛を瞶めたが、自分の膚も、人の体も、その時くらい清く、白く美しいのは見た事がない。

私は新しい着物を着せられ、娘は桃色の扱帯のまま、また手を曳いて、今度は裏梯子から二階へ上った。その段を昇り切ると、取着に一室、新しく建増したと見えて、襖がない、白い床へ、月影が潑と射した。両側の部屋は皆陰々と灯を置いて、鎮り返った夜半の事です。

好い月だこと、まあ、とそのまま手を取って床板を

蹈んで出ると、小窓が一つ。それにも障子がないので、二人で覗くと、前の甍は露が流れて、銀が溶けて走るよう。

月は山の端を放れて、半腹は暗いが、真珠を頂いた峰は水が澄んだか明るいので、山は、と聞くと、医王山だと言いました。

途端にくゎいと狐が鳴いたから、娘は緊乎と私を抱く。その胸に額を当てて、私は我知らず、わっと泣いた。

怖くはないよ、否怖いのではないと言って、母親の病気の次第。

こういう澄み渡った月に眺めて、その色の赤く輝く花を採って帰りたいと、始(はじめ)てこの人ならばと思って、打明(うちあ)けて言うと、暫(しばら)く黙って瞳(ひとみ)を据(す)えて、私の顔を見ていたが、月夜に色の真紅(しんく)な花——きっと探しましょうと言って、——可(よ)し、可(よ)し、女の念(おもい)で、と後(あと)を言い足したですね。

翌晩(あくるばん)、夜更(よふ)けて私を起しますから、素(もと)よりこっちも目を開けて待った処(ところ)、直ぐに支度(したく)をして、その時、帯をきりりと〆(し)めた、引掛(ひっかけ)に、先刻(さっき)言いましたね、刃(は)を手拭(てぬぐい)でくるくると巻いた鎌一挺(ちょう)。

それから昨夜(ゆうべ)の、その月の射す窓から密(そっ)と出て、

瓦屋根(かわらやね)へ下りると、夕顔の葉の搦(から)んだ中へ、梯子(はしご)が隠して掛けてあった。伝(つた)って庭へ出て、裏木戸の鍵をがらりと開けて出ると、有明月(ありあけづき)の山の裾(すそ)。

医王山は手に取るように見えたけれど、これは秘密の山の搦手(からめて)で、其処(そこ)から上(のぼ)る道はないですから、戸室口(とむろぐち)へ廻って、攀(よ)じ上(のぼ)ったものと見えます。さあ、此処(ここ)からが目差(めざ)す御山(おやま)というまでに、辻堂(つじどう)で二晩(ふたばん)寝ました。

後(あと)はどう来たか、恐(こわ)い姿、凄(すご)い者の路を遮(さえぎ)って顕(あらわ)るる度(たび)に、娘は私を背後(うしろ)に庇(かば)うて、その鎌を差翳(さしかざ)し、矗(すっく)と立つと、鎧(よろ)うた姫神(ひめがみ)のように頼母(たのも)しいにつけ、雲

の消えるように路が開けてずんずんと。」

時に高坂は布を断つが如き音を聞いて、唯（と）見ると、前へ立った、女の姿は、その肩あたりまで草隠（くさがく）れになったが、背後（うしろ）ざまに手を動かすに連（つ）れて、鋭（と）き鎌、磨ける玉の如く、弓形（ゆみなり）に出没して、歩行（ある）き歩行（ある）き掬切（すくいぎり）に、刃形（はがた）が上下（うえした）に動くと共に、丈（たけ）なす茅萱（ちがや）半（なか）ばから、凡（およ）そ一抱（ひとかかえ）ずつ、さっくと切れて、靡（なび）き伏して、隠れた土が歩一歩（ほいっぽ）、飛々（とびとび）に顕（あらわ）れて、五尺三尺一尺ずつ、前途（ゆくて）に渠（かれ）を導くのである。

高坂は、悚然（ぞっ）として思わず手を挙（あ）げ、かつて婦（おんな）が我に為（な）したる如く伏拝（ふしおが）んで粛然（しゅくぜん）とした。

その不意に立停(たちどま)ったのを、行悩(ゆきなや)んだと思ったらしい、
花売(はなうり)は軽(かろ)く見返り、
「貴方(あなた)、もう些(ちっ)とでございますよ。」
「どうぞ。」といった高坂は今更ながら言葉さえ謹(つつし)んで、
「美女ヶ原に今もその花がありましょうか。」
「どうも身に染(し)むお話。どうぞ早く後(あと)をお聞(きか)せなさいまし、そしてその時、その花はござんしたか。」
「花は全くあったんですが、何時(いつ)もそうやって美女ヶ原へお出(いで)の事だから、御存じはないでしょうか。」
「参りましたら、その姉(ねえ)さんがなすったように、一所(いっしょ)

にお探し申しましょう。」

「それでも私は月の出るのを待ちますつもり。その花籠（はなかご）にさえ一杯になったら、貴女（あなた）は日一杯に帰るでしょう。」

「否（いいえ）、いつも一人で往復（ゆきかえり）します時は、馴れて何とも思いませんでございましたけれども、憖（なま）じお連（つれ）が出来て見ますと、もう寂（さび）しくって一人では帰られませんから、御一所（ごいっしょ）にお帰りまでお待ち申しましょう。その代（かわり）どうぞ花籠の方はお手伝い下さいましな。」

「そりゃ、いうまでもありません。」

「そしてまあ、どんな処（ところ）にございましたえ。」

「それこそ夢のようだと、いうのだろうと思います。路すがら、そうやって、影のような障礙に出遇って、今にも娘が血に染まって、私は取って殺さりょうと、幾度思ったか解りませんが、黄昏と思う時、その美女ヶ原というのでしょう。凡八町四方ばかりの間、扇の地紙のような形に、空にも下にも充満の花です。

そのまま二人で跪いて、娘がするように手を合せておりました。月が出ると、余り容易い。つい目の前の芍薬の花の中に花片の形が変って、真紅なのが唯一輪。

採って前髪に押頂いた時、私の頭を撫でながら、

余(あまり)の嬉(うれ)しさ、娘ははらはらと落涙(らくるい)して、もう死ぬまで、この心を忘れてはなりませんと、私の頭(つむり)に挿(さ)させようとしましたけれども、髪は結んでないのですから、そこで娘が、自分の黒髪に挿しました。人の簪(かんざし)の花になっても、月影に色は真紅(しんく)だったです。

母様(おっかさん)の御大病(ごたいびょう)、一刻も早くと、直(すぐ)に、美女ヶ原を後(あと)にしました

引返す時は、苦(く)もなく、すらすらと下りられて、早や暁(あかつき)の鶏(とり)の声。

嬉(うれ)しや人里も近いと思う、月が落ちて明方(あけがた)の闇を、向うから、洶々(どやどや)と四、五人連(づれ)、松明(たいまつ)を挙(あ)げて近寄った。

人可懐くいそいそ寄ると、いずれも屈竟な荒漢で。中に一人、見た事のある顔と、思い出した。黒婆が家に馬を繋いだ馬士で、その馬士、二人の姿を見ると、遁がすなと突然、私を小脇に引抱える、残った奴が三人四人で、ええ！　という娘を手取足取。何処をどう、どの方角をどのくらい駈けたかまるで夢中です。

やがて気が付くと、娘と二人で、大な座敷の片隅に、馬士交り七、八人に取巻かれて坐っていました。

何百年か解らない古襖の正面、板の間のような床を背負って、大胡坐で控えたのは、何と、鳴子の渡を

仁王立で越した抜群なその親仁で。

恍惚した小児の顔を見ると、過日の四季の花染の袷を、ひたりと目の前へ投げて寄越して、大口を開いて笑った。

や、二人とも気に入った、坊主は児になれ、女はその母になれ、そして何時までも娑婆へ帰るな、と言ったんです。

娘は乱髪になって、その花を持ったまま、膝に手を置いて、首垂れて黙っていた。その返事を聞く手段であったと見えて、私は二晩、土間の上へ、可恐い高い屋根裏に釣った、駕籠の中へ入れて釣されたんです。

紙に乗せて、握飯（にぎりめし）を突込（つッこ）んでくれたけれど、それが食べられるもんですか。

垂（たれ）から透（すか）して、土間へ焚火（たきび）をしたのに雪のような顔を照らされて、娘が縛られていたのを見ましたが、それなり目が眩（くら）んでしまったです。どんと駕籠（かご）が土間に下りた時、中から五、六疋（ぴき）鼠がちょろちょろと駈出（かけだ）したが、代（かわり）に娘が入って来ました。

薫（かおり）の高い薬を噛んで口移しに含められて、膝に抱かれたから、一生懸命に緊乎（しっかり）縋（すが）り着くと、背中へ廻った手が空を撫（な）でるようで、娘は空蟬（うつせみ）の殻（から）かと見えて、唯（たっ）た二晩がほどに、糸のように瘠（や）せたです。

もうお目に懸られぬ、あの花染のお小袖は記念に私に下さいまし。しかし義理がありますから、必ずこんな処に隠家があると、町へ帰っても言うのではありません、と蒼白い顔して言い聞かす中に、駕籠が舁かれて、うとうとと十四、五町。

奥様、此処まで、と声がして、駕籠が下りると、一人手を取って私を外へ出しました。

左右に土下座して、手を支いていた中に馬士もいた。一人が背中に私を負うと、娘は駕籠から出て見送ったが、顔に袖を当てて、長柄にはッと泣伏しました。それッきり。」

高坂は声も曇って、

「私を負（おぶ）った男は、村を離れ、川を越して、遥（はるか）に鈴見（すずみ）の橋の袂（たもと）に差置（さしお）いて帰りましたが、この男は唖（おうし）と見えて、長い途（みち）に一言も物を言やしません。

私は死んだ者が蘇生（よみがえ）ったようになって、家（うち）へ帰りましたが、丁度（ちょうど）全三月（まるみつき）経（た）ったです。

花を枕頭（まくらもと）に差置（さしお）くと、その時も絶え入っていた母は、呼吸（いき）を返して、それから日増（ひまし）に快（よ）くなって、五年経ってから亡くなりました。魔隠（まかくし）に逢った小児（こども）が帰った喜びのために、一旦本復（いったんほんぷく）をしたのだという人もありますが、私は、その娘の取ってくれた薬草の功徳（くどく）だと思う

です。
それにつけても、恩人は、と思う。娘は山賊に捕われた事を、小児心（こどもごころ）にも知っていたけれども、堅（かた）く言付（いいつ）けられて帰ったから、その頃三ケ国横行（おうこう）の大賊（たいぞく）が、つい私どもの隣（となり）の家（うち）へ入った時も、何（なんに）も言わないで黙っていました。
けれども、それから足が附いて、二俣（ふたまた）の奥、戸室（とむろ）の麓（ふもと）、岩で城を築（つ）いた山寺に、兇賊（きょうぞく）籠（こも）ると知れて、まだ邏卒（らそつ）といった時分、捕方（とりかた）が多人数（たにんず）、隠家（かくれが）を取巻いた時、表門の真只中（まっただなか）へ、その親仁（おやじ）だと言います、六尺一つの丸裸体（まるはだか）、脚絆（きゃはん）を堅く、草鞋（わらじ）を引〆（ひきし）め、背中へ十文

字に引背負（ひっしょ）った、四季の花染（はなぞめ）の熨斗目（のしめ）の紋着（もんつき）、振袖（ふりそで）が颯（さっ）と山颪（やまおろし）に縺（もつ）れる中に、女の黒髪（くろかみ）がはらはらと零（こぼ）れていた。

手に一条（ひとすじ）大身（おおみ）の槍（やり）を提（ひっさ）げて、背負（しょ）った女房が死骸でなくば、死人の山を築（きず）くはず、無理に手活（ていけ）の花にした、申訳（もうしわけ）の葬（とむらい）に、医王山の美女ヶ原、花の中に埋（うず）めて帰る。汝（うぬ）ら見送っても命がないぞと、近寄ったのを五、六人、蹴散らして、ぱっと退（ひ）く中を、衝（つ）と抜けると、岩を飛び、岩を飛び、岩を飛んで、やがて槍を杖（つ）いて岩角（いわかど）に隠れて、それなりけりというので、さてはと、それからは私がその娘に出逢う門出（かどで）だった誕生日

に、鈴見(すずみ)の橋の上まで来ては、こちらを拝んで帰り帰りしたですが、母が亡(なく)なりました翌年から、東京へ修行に参って、国へ帰ったのは漸(やっ)と昨年。始終望んでいましたこの山へ、後(あと)を尋ねて上(のぼ)る事が、物に取紛(とりまぎ)れている中(うち)に、申訳(もうしわけ)もない飛んだ身勝手な。

またその薬を頂かねばならないようになったです。以前はそれがために類少(たぐいすくな)い女を一人、犠(いけにえ)にしたくらいですから、今度は自分がどんな辛苦(しんく)も決して厭(いと)わない。いかにもしてその花が欲しいですが。」

言う中(うち)に胸が迫って、涙を湛(たた)えたためばかりでない。ふと、心付(こころづ)くと消えたように女の姿が見えないのは、

草が深くなった所為(せい)であった。

丈(たけ)より高い茅萱(ちがや)を潜(くぐ)って、肩で掻分(かきわ)け、頭(つむり)で避(よ)けつつ、見えない人に、物言い懸(か)ける術(すべ)もないので、高坂は御経(おきょう)を取って押戴(おしいただ)き、

山川険谷(さんせんけんこく)　幽邃所生(ゆうすいしょしょう)　卉木薬艸(きぼくやくそう)

大小諸樹(だいしょうしょじゅ)

百穀苗稼(ひゃくこくびょうが)　甘庶葡萄(かんしょぶどう)　雨之所潤(うししょじゅん)

無不豊足(むふぶそく)

乾地普洽(かんちぶごう)　薬木並茂(やくぼくひょうも)　其雲所出(ごうんしょしゅつ)

一味之水(いちみしすい)

葎(むぐら)の中に日が射して、経巻(きょうかん)に、蒼く月かと思う草

の影が映ったが、見つつ進む内に、ちらちらと紅来り、黄来り、紫去り、白過ぎて、蝶の戯るる風情して、偈に斑々と印したのは、はや咲交る四季の花。忽然として天開け、身は雲に包まれて、妙なる薫袖を蔽い、唯見ると堆き雪の如く、真白き中に紅ちらめき、瞶むる瞳に緑映じて、颯と分れて、一つ一つ、花片となり、葉となって、美女ヶ原の花は高坂の袂に匂ひ、胸に咲いた。

花売は籠を下して、立休ろうていた。笠を脱いで、襟脚長く玉を伸べて、瑩沢なる黒髪を高く結んだのに、何時の間にか一輪の小な花を簪していた、棲はずれ、

袂の端、大輪の菊の色白き中に佇んで、高坂を待って、莞爾と笑む、美しく気高き面ざし、威ある瞳に屹と射られて、今物語った人とも覚えず、はっと思うと学生は、既に身を忘れ、名を忘れて、唯九ツばかりの稚児になった思いであった。

「さあ、お話に紛れて遅く来ましたから、もうお月様が見えましょう。それまでにどうぞ手伝って花籠に摘んで下さいまし。」

　と男を頼るように言われたけれども、高坂はかえって唯々として、あたかも神に事うるが如く、左に菊を折り、右に牡丹を折り、前に桔梗を摘み、後に朝顔を

手繰(たぐ)って、再び、鈴見(すずみ)の橋、鳴子(なるこ)の渡(わたし)、畷(なわて)の夕立、黒婆(くろばば)の生豆腐(なまどうふ)、白姥(しろうば)の焼茄子(やきなすび)、牛車(うしぐるま)の天女、湯宿(ゆやど)の月、山路(やまじ)の利鎌(とがま)、賊の住家(すみか)、戸室口(とむろぐち)の別(わかれ)を繰返して語りつつ、やがて一巡した時、花籠は美しく満たされたのである。

すると籠は、花ながら花の中に埋(う)もれて消えた。

月影が射したから、伏拝(ふしおが)んで、心を籠(こ)めて、透(す)かし透かし見たけれども、眴(みまわ)したけれども、見遣(みや)ったけれども、ものの薫(かおり)に形あって仄(ほのか)に幻(まぼろし)かと見ゆるばかり、雲も雪も紫も偏(ひとえ)に夜の色に紛(まぎ)るるのみ。

殆(ほとん)ど絶望して倒れようとした時、思い懸(が)けず見ると、

肩を並べて斉しく手を合せてすらりと立った、その黒髪の花唯一輪、紅なりけり月の光に。
高坂がその足許に平伏したのは言うまでもなかった。
その時肩を落して、美女が手を取ると、取られて膝をずらして縋着いて、その帯のあたりに面を上げたのを、月を浴びて﨟長けた、優しい顔で熟と見て、少し頬を傾けると、髪がそちらへはらはらとなるのを、密と押える手に、簪を抜いて、戦く医学生の襟に挟んで、恍惚したが、瞳が動き、
「ああ、お可懐い。思うお方の御病気はきっとそれで治ります。」

あわれ、高坂が緊乎(しっか)と留(と)めた手は徒(いたずら)に茎を摑(つか)んで、袂(たもと)は空に、美女ケ原は咲満(さきみ)ちたまま、ゆらゆらと前へ出たように覚えて、人の姿は遠くなった。

立って追おうとすると、岩に牡丹(ぼたん)の咲重(さきかさな)って、白き象(ぞう)の大(おおい)なる頭(かしら)の如き頂(いただき)へ、雲に入(い)るよう衝(つ)と立った時、一度その鮮明(あざやか)な眉(まゆ)が見えたが、月に風なき野となんぬ。

高坂は撞(どう)と坐した。

かくて胸なる紅(くれない)の一輪を栞(しおり)に、傍(かたわら)の芍薬(しゃくやく)の花、方(ほう)一尺なるに経(きょう)を据(す)えて、合掌(がっしょう)して、薬王品(やくおうほん)を夜もすがら。

底本：「鏡花短篇集」岩波文庫、岩波書店
　　　１９８７（昭和62）年9月16日第1刷発行
底本の親本：「鏡花全集　第七巻」岩波書店
　　　１９４２（昭和17）年7月初版発行
初出：「二六新報」
　　　１９０３年（明治36年）５月16～30日
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：砂場清隆
校正：門田裕志
２００１年12月22日公開

２００５年12月1日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。